

# 第12回 European Glaucoma Society (EGS) Congress 印象記

(2016年6月19日(日)~22日(水), チェコ共和国, プラハ)

## EGS (ヨーロッパ緑内障学会) 2016 印象記

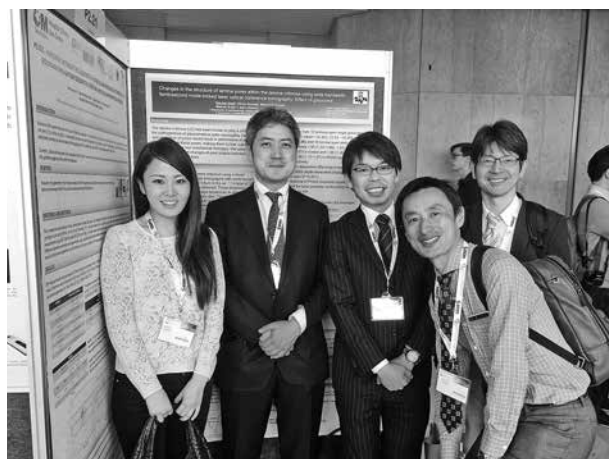
埼玉医科大学眼科学教室 庄司拓平

2016年6月19日~22日にチェコ共和国の首都プラハで開催された第12回 European Glaucoma Society (EGS) Congressに参加しました。プラハは大変風光明媚な都市で、美しい街並みに魅せられた多くの観光客で賑わっていました。今回は、学会開催前にプラハに入り、陸路で隣国オーストリアのウィーン大学に見学に行きました。

ウィーン大学は1365年創立で、創立時の建物は現在使用されていないものの、旧市街地に現存しており、観光地のひとつになっていました。その場所から徒歩数分の場所に、病院を含めた現在の大学施設がありました。ウィーン大学のDrexler教授は、先進的な光干渉層計(optical coherence tomography : OCT)の開発者として世界的に有名で、数多くのプロトタイプOCTを開発し報告されていることから、以前から興味がありました。今回はPircher准教授とDr. Salasの案内で研究室を見学することができました。

大学は市内の中心部にあるにもかかわらず、敷地は非常に広大でした。診療部門とは別のフロアに独立したOCT研究施設があり、20以上ある各研究室にそれぞれのテーマに沿ったプロトタイプの画像診断機器が備えられていました。約50人の研究者が在籍し、日々、開発を行っているとのことで、質量ともに圧倒されました。研究用機器はAO (adaptive optics) -SLO, AO-OCT, PS (polarization-sensitive) -OCT, Doppler-OCT, line-scan OCT, digital AO, UHR (ultrahigh-resolution) -OCTなどがあり、まさにOCT博物館のような施設でした。

さて、学会初日のレセプションでは民族衣装を身にま



ポスター前にて(左より、安達先生、木村至先生、筆者、芝先生、狩野先生)

とった方々から歓待を受け、会場も大いに盛り上がりました。2日目の午前中のメイン会場では“AAO/EGS Joined Session”があり、会場はほぼ聴講者で埋まっていました。このなかでTin Aung先生が落屑緑内障と関連する遺伝子の講演をされました。この講演の中でとくに日本での業績を高く評価され、写真付きで何枚ものスライドにわたって報告されたことが印象的でした。また、“OCT : recent advances”というセッションも拝聴しましたが、座席は完全に埋まり、立ち見の聴講者が多数いるほどの盛況ぶりでした。興味深かったのは、以前から血流について報告されているSchmetterer先生の講演で、昨今のOCT angiographyの有効性を明らかにしつつも多くの課題があることを解説されていました。

私自身の発表では、いくつか質問を受けましたが想定範囲のものが多く、安堵しました。また、展示ブースでは、日本では未承認デバイスの実演コーナーがあり、MIGS (minimally invasive glaucoma surgeries) 時代の到来を改めて実感させられました。学会終了後は市内を観光しましたが、夜が更けるとカレル橋がライトアップ

され、非常に美しく感動しました。

今回、日本緑内障学会フェローシップグラントの申請を採択していただいたことに感謝し、厚くお礼申し上げます。この学会で学んだことを、今後の研究・診療に生かしていきたいと思えます。

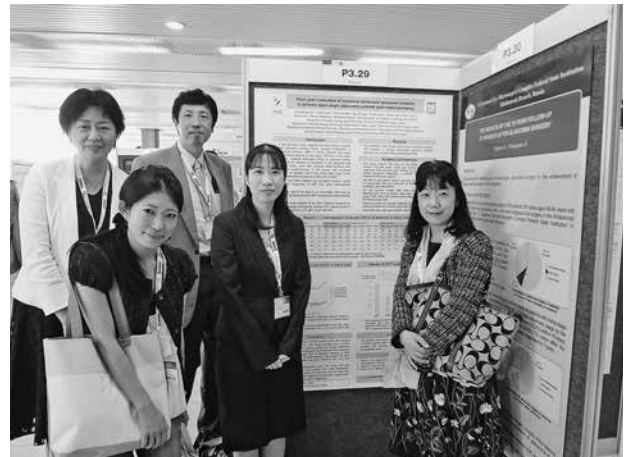
## 12th European Glaucoma Society Congressに参加して

市立福知山市民病院眼科 丸山 悠子

2016年6月19日～22日までの4日間、チェコ共和国のプラハで開催された第12回EGS (European Glaucoma Society) Congressに参加させていただく機会を得ましたので、報告させていただきます。

プラハはチェコ共和国の首都で、日本からは直行便がないため、ヨーロッパ内で乗り継いで約15時間程度で到着します。プラハは北緯50度の位置にあたり、日本の北海道の最北端よりも北に位置しています。6月は夏至の時期に当たることもあり、朝早くから夜遅くまで明るく、時間を間違えそうになるくらいでした。気温は日本より少し涼しい感じで、梅雨もなく、湿度も低くて乾燥しているため、非常に過ごしやすい気候でした。

本学会で私は、京都府立医科大学で線維柱帯切除術 (trabeculectomy : TLE) を施行され、ニードリングなどの追加処置や追加の点眼処方などを必要としなかった経過良好例325例 (最低1年以上は経過良好である症例) に限り、最大経過観察期間は4年間) を対象とした術後眼圧の季節変動の有無について、発表させていただきました。正常対照者や手術前の緑内障患者で眼圧の季節変動があることはよく知られていますが、TLE後の眼圧の季節変動に関しては論文上でも発表がほとんどなく、多くの方に興味をもっていただけたように思います。結果として、TLE後は手術前より眼圧の季節変動は少なくなるものの、やはり有意差をもって眼圧の季節変動が残っていることがわかりましたので、冬場だけマッサー



ポスター発表風景 (後列の左より、三戸先生、森先生、前列の左より、多田先生、筆者、池田先生)

ジをしてもらうなどの対策も場合によっては考慮していく必要があると考えられ、今回の研究を今後、少しでも実際の臨床に役立てていけたらと思っております。

今までも何度か、海外学会でポスター発表をさせていただく機会がありましたが、やはり英語での質疑応答は内容によってはむずかしいことも多く、英語力の必要性をあらためて感じることとなりました。今後も英語も含めて、さらにいろいろと勉強を重ねつつ、海外の学会での発表も続けていくことができたらと思っております。また、今回の学会でも多くの日本の諸先生方がポスター発表をされており、内容の素晴らしさ、発表の質の高さをあらためて実感することができ、同じ日本人として誇りに思いました。

最後に、このたびはこのような発表をさせていただく機会を与えてくださいました、京都府立医科大学の外園千恵教授、木下 茂教授、森 和彦講師、池田陽子客員講師、市立福知山市民病院の香川恵造院長、そして、日本緑内障学会フェローシップグラントに採択してくださいました先生方に深く感謝を申し上げます。今回の体験を今後の臨床、研究にいかしていきたいと思っております。